

津和野の地域おこしを教育の観点から学ぶ

国内研修で島根県鹿足郡津和野町に行ってきた。かつて城下町であり、山陰の小京都と呼ばれる小さな町だ。江戸時代、津和野藩という4万石の小藩であった。文豪森鷗外や啓蒙思想家西周が生まれ育った町でもある。人口が最も少ない県である島根県。そのなかの小さな町に地域おこし協力隊というものが派遣され面白そうなことを行っているのを知り、現地に到着して間もなく20時から町営の英語塾であるHANKOUを訪問した。江戸時代、この地に藩校養老館が存在した。この塾は町内唯一の高校である津和野高校のすぐ隣にある。このHANKOUの説明の前に津和野高校の説明をする。津和野高校は、少し前まで廃校寸前であった。それが今では、入試倍率が1.0倍を超え、県外からも生徒を集めるほどとなった。そしてこの町営英語塾もその取り組みの一部である。塾といっても学校との結びつきが強く、第2の学校という感じだ。近隣の2の中学校と津和野高校から生徒が通う。町営の塾という聞きなれないものがあり、どうして県外からも生徒が入学するようになったのか、ここではどのような教育が行われているのか、津和野の地域おこしを教育的な視点からとらえようとした。それが今回の研修の自分の目的である。

HANKOUに到着し、高校魅力化コーディネーターに会い、中の様子を見せてもらった。とてもアットホームな雰囲気であった。そこでは英語の授業だけでなく将来の進路について考える時間もあった。学校の授業という総合学習のような時間だ。そこで実際に県外から来た生徒と話すことができた。中学生の時点で地元を離れて1人で暮らそうと思ったのはなぜなのか、都会を離れわざわざこの津和野を選んだのはなぜなのか聞いた。皆この高校がよさそうだからといったが、その魅力はいったい何なのか次なる疑問が生まれた。自分が東京から来た大学生だと知ると、たくさん質問しにきた。みな将来について考え高1にしては大人に見えた。

2日目は町内の様々な場所を案内してもらった。始めに公民館を訪れ、館長に会った。この公民館には多くの人が訪れ、高校生は町内である取り組みを行いたい時にここを訪れるそうだ。次に訪れた場所はある米屋さん。そこは多くの人が立ち寄りおしゃべりをしていくような場所である。かつて地域おこし協力隊もお世話になったという。そこのご夫婦の話を聞くことができた。とても温かい人柄であった。次にIターンやUターンの人たちが営むレストランに行った。そこでも多くの人が集まる温かい場所であった。次に訪れた場所は、町内のある和菓子屋さんである。そこで働くある人の話を聞いた。彼はある人物の講義を町の子どもに聞かせようと学校に進言したのである。そして町の子どもに対しての熱い思いを聞かせていただいた。彼は、この町はこどもが過ごすのにはとてもいい環境だが、その点、こどもが何か壁にぶち当たったときそれを乗り越えていけるのかという心配をしていた。ここまで地域の子どもを思う大人が我々の周りにいだろうか。

ここまでたくさんの人たちの話を聞いて、思ったことがある。それは、町全体で子供を育てているということである。今まであった人たちは町に対してとても愛情を持っているよ

うに思える。そしてそれは子どもを育てるということにつながっているのだろう。多くの大人に見守られ、子どもものびのびと過ごせるのだろう。さらに、町の人が集まれるような開かれた場所が多く、町民同士の結びつきも強いのだろう。都会暮らしでは味わうことのできないものだ。

そして再び津和野高校に戻った。高校魅力化コーディネーターの話を聞いた。2年前に創設された、グローバルラボという部活動を見学させてもらった。この部活は、学生自身で様々なことを企画して活動するというクラブだ。自分で何かを考え取り組むということ、自分は大学に入ってから学んだ。それを高校生たちはすでにやっているといことに驚きをおぼえた。しかし、今回の訪問時の活動は近くの竹林に行き竹を伐採するというものであった。ともあれ、自分で考え行動を起こすという、大学で養う力を高校生にしてはぐくむことができるというとてもいい環境であった。主体性や自発的な心を成長できるような場であった。本来、学校とはこうあるべきなのかもしれない。この津和野高校ではどんな進路も実現できるのではないかと思った。町内唯一の高校ということもあり、町との結びつきも強いのだろう。

この津和野での教育を見て、他の場所でも実現できることが出来たらと思う。それぞれのいいところをうまく折衷していくにはどうしたらよいのか。現地にでてこそ考えることがあった。そしてこれから教育や子供の支援を学んでいくうえで今回の研修を活かしていきたいと思う。

津和野に行くまでも多く人の協力があつた。東京で津和野を広めている人や、地域おこし協力隊として津和野に行っていた人物とお話をする事ができた。多くの大人と接し、自分の未熟さも実感した。

少子高齢化や若者の流出という問題に直面している津和野町。たしかにそこには藩校の精神が受け継がれていた。今回の研修で会った町の人にはそれぞれの理念のようなものを垣間見ることができた。行きかう人は挨拶をして頂いたり、都会で希薄になった人とのつながりの良さ温かみをみせてもらった。時間がゆっくり流れる場所であった。多くの哲人が住む町であった。